

「いま」をていねいに生きる。

岐阜教会 三島希美依さん

三島希美依さんは、家事や介護に加え、将来のためにと四つの仕事を掛け持ちする忙しさから、激しい腰痛に襲われた。心と体が悲鳴をあげたのだ。しばらく動けず、虚しさを感じた。<私は何を追い求めているのだろう>。夫との会話、家事、何もかもが中途半端だった。思い切って、全ての仕事を辞めた。家庭を中心に、「いま」をていねいに生きていこうと心に誓ったのだ。朝、夫を「いってらっしゃい」と送り出す。夕食をともにしながら子どもと会話を弾ませる…。収入は減ったが、心はむしろ満たされた。そうした中、実母が緊急入院する、さらに、息子が貸したバイクで友だちが重大事故に遭った。ただ祈ることしかできない。それでも、「祈ることで仏さまやご先祖のおかげ、目に見えぬ多くの支えて自分は生かされている」と感じられた。幸い、命は守られた。目の前のことに向き合い、ていねいに生きる。三島さんは「手を伸ばしてもつかめなかった幸せが、目の前に溢れていた」と屈託なく笑う。



怠け心に負けない

私たちは、ともすると、なすべきことを怠^{おぼ}たり、しないと決めたことを、ついしてしまったりします。お互いさま、「わかっちゃいるけど……。」と、反省することが少なくないのではないのでしょうか。

仏教では、「常精進^{じょうしんじん}」が大事と教えます。また、儒教^{じゆきやう}などの聖賢^{せいけん}の教えでも、常に学び、身を修^{おさ}める努力をにつけることの大切さが説かれます。それは、人間の心の成長に「これでいい」という終わりがありません。

しかし、それがわかっているにもかかわらず、内心の誘惑に負けてしまうのが人間です。ただ、迷うのも楽をしたいと思っても自然なこと、ときには心の逃げ場も必要だと思いません。そのとき、目的や目標を忘れなければいいのです。

法華経^{ほけきやう}の「安楽行品^{あんらくぎやうひん}」には、「一切を慈悲^{じひ}して、懈怠^{けだ}の心を生ぜざれ」とあります。人を思う気持ちが盛んなときは、飽きたり怠^{なま}けたりする心が生まれにくいのです。それはつまり、「自分を待っていてくれる人がいる」と思うとき、人は自己中心の思いから離れ、その人の役に立ちたいという願いが湧いてきて、精進の一つ二つが喜びや楽しみに変わるといふことでしょう。

日本だけでなく、世界がさまざまな困難に見舞われています。みなさんのまわりには、あなたを待っている人はいませんか。